日本文学全集

8

# 太平記

日本文学全集 8

# 太平記

河出書房新社

日本文学全集 8 太平記

© 1961

編集委員
青野季吉　荒正人
川端康成　瀬沼茂樹
中島健蔵

装幀者
原　弘

N D C

昭和36年1月5日初版印刷
昭和36年1月10日初版発行

定価 290円

訳者　尾崎士郎
発行者　河出孝雄
印刷者　中内佐光

印刷：暁印刷株式会社
製本：株式会社 小高製本所
本文用紙：王子製紙工業株式会社
同納入：株式会社大和屋洋紙店
クロース：日本クロス工業株式会社
同納入：株式会社小島洋紙店

発行所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社 河出書房新社
電話東京(291)3721～7
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

# 目次

太平記

第一篇……三
第二篇……一六七
第三篇……三一

注釈……池田弥三郎……四五三
解説……山本健吉……四九九

# 太平記

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

# 第一篇

## その一　後醍醐天皇の御治世のこと、並びに武家の勢力が盛んなこと

神武天皇から九十五代目にあたる後醍醐天皇の御治世のころ、北条相模守平高時という武家がいた。この時代は、天皇の権威がすたれ、君主としての徳を欠くとともに、武家は臣下としての礼節を失っていた。それがために、天下は乱れに乱れ、戦のつづくこと四十余年、狼煙は天をかすめ、関の声の地をふるわせぬ日とてはなく、人々は天寿を全うするどころか、戦々兢々として身の置きどころもないという有様だった。

この戦乱の原因は遠く元暦年間にさかのぼる。鎌倉の右大将源頼朝が平家を討伐した功により、後白河天皇から六十六個国総追捕使に任ぜられた時から武家の勢力は急激に増大し、諸国に守護を任命し、庄園には地頭を置いて租税や軍事を司り、その地域の治安を担当したために天下の実権は源氏の握るところとなったのである。

しかし、頼朝についで征夷大将軍に任ぜられた長男の頼家が、弟の実朝の手兵によって伊豆修善寺で討たれ、その実朝もまた、頼家の子で鎌倉鶴岡八幡宮の別当になっていた公暁のために刺され、さしもの源氏も父子三代、わずかに四十二年で滅びたので、実権は自然に、頼朝の妻政子の弟で、鎌倉幕府の執権職についていた北条義時の手にうつり、その勢威は日本全土を圧倒するばかりになった。

この時、御位を譲って上皇になっていられた後鳥羽院は、武家の勢力が盛んになって朝廷の法令の有名無実になることを嘆き、北条氏を亡ぼそうと御計画になられた。

これが承久の乱である。合戦は宇治、勢多で行なわれたが、官軍は一日をもちこたえることもできず敗退したので、後鳥羽院は隠岐の島に流され、北条義時が完全に天下を掌中におさめることになった。

それ以後、武蔵守泰時、修理亮時氏、武蔵守経時、相模守時頼、左馬権頭時宗、相模守貞時と、七代続いて北条氏の政治が行なわれたが、代々、人民を慈しんで徳望あつく、その勢威は天下を圧していたけれども、権勢に驕らず、位も四位以上を望まぬ謙虚さで、民に仁恩をほどこし、まずみずから反省して礼儀を正しくするというやりかただったので、鎌倉幕府の地位は、高くして、し

かも危からず、満ちて、しかも溢れ出ることのないという、きわめて安定したものとなった。

承久の乱の後は、皇族または摂家の中からすぐれた政治力をそなえた貴族を選んで鎌倉に迎え、これを征夷大将軍と仰いで、北条氏以下の武家は臣下の礼をとる習わしとなった。承久三年六月には、一族の者二人を京都に派遣して両六波羅と称し、西国の政治を指図したり、京都の守護に任じたりさせたが、永仁元年には九州に探題を置き、九州の政治を司らせるとともに、外敵の来襲に対する備えを固めさせた。

このように内治国防に意を用いたため、天下ことごとく北条氏の威令に服するようになったが、朝日が昇れば星の光は自然に薄れてゆくのと同じで、北条氏に朝廷を軽んずるつもりはなくても、その勢いが盛んになるにつれて、朝廷の威光が衰微してゆくのは自然のなりゆきである。このため、地方によっては幕府の任命した地頭の勢力が強くて庄園の持主を圧迫し、守護の方が国司よりも重んぜられるという傾向を生じ、朝廷の権威は年々に衰え、武家はいよいよ盛んになってきた。

代々の天皇も、遠くは承久の乱に敗れた後鳥羽上皇の霊を慰めんがため、また近くは、日々に廃れてゆく朝廷の政治力を回復するがために、北条氏討伐の策をめぐらしたことはあるが、朝廷の力が弱くて実行できなかったり、またはその時を得ないままに隠忍自重してきたのである。ところが、時政から数えて九代目にあたる高時の代になって、初めて天地の運命の一新すべき兆候があらわれてきた。というのは、この高時が暗愚な男で、権勢に驕って日夜ただ遊興にふけり、政治を怠って人民の苦しみを顧みず、祖先の遺功を辱かしめるばかりか、北条氏の運命もここにきわまったと思わせるような暴政のかぎりを尽くしたので、これを見聞きする人々もあきれて眉をひそめ、悪口を言わぬ人とてないという有様だったからである。

この時、帝位にあった後醍醐天皇は、後宇多院の第二皇子で、談天門院を母として生まれたが、御年三十一の時、高時のはからいで御位につかれて以来、儒教の教えにある三綱五常の道を正すとともに、延喜・天暦の聖代*を模範として政務に精励し、仁慈を垂れたので、万民みな天皇の徳を賛え、ふたたび聖代にめぐりあったことを喜びあった。天皇は、武家政治によって廃れた道徳を復興し、善事は残すことなく褒賞したので、神社仏閣、諸宗派も時を得て繁栄し、仏教や儒教の大学者もみな望みを達して重く用いられるようになった。まことに生まれながらの聖天子であると、天皇の徳を賛えぬものもないほどであった。

## その二　関所を廃止すること

当時、諸国に関所が設けられていたが、関所は本来、人民に国の威力を知らしめるとともに、非常の時に備えるためのものである。ところが、北条高時の時代になると、関所の役人が役目を笠にきて横暴をはたらき、通行の旅人から金銭を取り立てて私利をこやしたり、みだりに新しい関所を設けて良民を苦しめたりするような弊害を生じてきたので、後醍醐天皇は、年貢の運送の妨げになる、という名目で、近江の大津と河内の葛葉にある関所のほかは、新しい関所を全部廃止してしまった。

元亨元年の夏には大旱魃があって、畿内周辺の国々では土地は赤焼けとなり、田という田は枯れはてて一もとの青い苗も見られず、餓死する人も数えきれないという惨状で、粟一斗に銭三百という法外な高値さえ呼んで人民の困苦は言語に絶するものがあった。

この窮状を聞き知った後醍醐天皇は、

「朕の不徳のためにこの飢饉のおこったものならば、天はよろしく朕一人を罰すべきなのに、なんの罪咎もない人民がこの災厄に遭うとは何事であろうか」

と、自分が帝王の徳に欠けていることを嘆き、みずから朝飯をやめて窮民に米を施したが、それくらいのことで万民の飢えを救うことのできるわけもない。そこで天皇は検非違使の別当に命じて、裕福な人たちが利益を貪ろうとして匿し持っていた穀物を調査し、町に仮小屋を建て、ここで役所の定めた値段で一般に売りさばかせたが、その結果、売る方も買う方も利益を得て、皆、豊かになったような気もちで喜び合った。

そのほか、人民のあいだに訴訟事件のおきたときには、もし当路の役人が下情に通じていないため判決に不公正があってはいけない、という考慮から、天皇みずから法廷へ出向き、直接訴えを聞いたうえで理非の判決を下した。このため、田地にかかわる訴訟事件などは跡を絶ち、処刑用の鞭は無用の長物と化して朝廷に不満をいだく人間もなくなった。

かように治世安民の実を挙げた後醍醐天皇の政治は、その才知の点からいえば、まことにりっぱなものであったが、ただ残念なのは、天皇がひたすら力をもって国を治めようとすることに急であったため、度量が狭く寛宏の態度に欠けていたことである。せっかく北条氏を倒して朝権を回復しながら、これを維持すること三年を越えなかったのも、帰するところは天皇が狭量にすぎたためである。

## その三　皇后を立てること並びに三位の局のこと

文保二年八月三日、のちの西園寺太政大臣実兼の娘である藤原禧子が皇妃の位につき、弘徽殿にはいった。この家からは、すでに五代もつづいて娘を女御に立ててきたが、これは承久の乱ののち、代々の北条氏が西園寺家を重んじてきたからであって、この一家の繁栄ぶりには世間の人々も目を見はるばかりだったのである。したがって、後醍醐天皇も、北条高時の推挙にやむをえず禧子を皇妃の位につけたものと思われる。

藤原禧子はそのとき十六歳、金鶏を描いた襖をめぐらし、宝玉をちりばめた弘徽殿のお部屋におさまって、その美しさはいよいよみがきがかかり、若々しい桃の花が春の陽光になまめき、青柳が風になぶられるにも似た風情は、古の支那に美人としてその名を伝えられている毛嬙や西施も恥じて顔を伏せ、絳樹や青琴も自分の顔を鏡に映してみる気にならないだろうと思われるばかりであった。

されば天皇の御寵愛もさだめし深いことだろうと思われたが、案に相違して天皇の愛は木の葉よりも薄かったので、禧子は一生涯、天皇のおそば近くかしずくこともなく、御殿の奥深くひとり籠って、春の日の暮れるにおそいことを嘆き、秋の夜長を涙で明かす明け暮れであった。きらびやかな御殿に人影もなく、消え残った燈火の影がきらきらと壁にゆらめき、香炉の香もすでに消え、窓うつ雨の音の蕭々と聞えてくるのにも胸ふさがり、涙をさそわれるのであった。支那の詩人、白楽天が、

人生婦人の身となることなかれ
百年の苦楽　他人による

と、うたったのも道理であると思われる。

ちょうど、そのころ、阿野中将公廉の娘で三位の局とよばれる女官が皇后の御所に仕えていたが、天皇はこの女官をひと目見ただけで気に入られ、その寵愛ぶりは他に較べるものもなかった。寵愛をうばわれた宮中の美女たちは、悲嘆のあまり顔色蒼然となったほどである。だいたい、どんなに美しい女であろうと、ただ容姿が美しく、なまめかしいというだけでは、天皇の恩寵をつなぎとめることのできるものではない。天皇の言葉をまたずにその意中を読みとる機知がなければならないのだが、この二つを兼ねそなえた三位の局は、春の花見、秋の月見はいうまでもなく、天皇の行く所へは影の形に随うように つき従い、その容姿の美しさと弁舌の巧みさとをもって奉仕したので、これに魂をうばわれた天皇は、ついに政治を怠るようになったばかりか、三位の局に准后の称号を与えさえした。まったく皇后と同等の待遇である。三位の局のめざましい栄達に驚いた世の人々は、男の子を生むことを軽んじ、ひたすら女の子を生みたいと願ったほどであった。

こうなると、御前会議や裁判も乱れ、准后の口添えがあったと言いさえすれば、記録所の長官は功労のない者にも褒美を与え、裁判官は罪なき者を罪におとすようなことにさえなった。昔、支那の詩人は、楽しんでも淫らにならず、悲しんでも心をやぶらないのが皇后の心ばえだと賛えうたっているが、わが国においては、美女が国を乱す原因をつくっているのだ。まことになさけないことである。

## その四　皇太子のこと

きりぎりすは、たくさんの雌が集まっても互いに親しみ合って争わないので、その種族が繁栄するといわれているが、わが皇室もそれと同じで、皇后のほかにも天皇の寵愛をうけた女官が多かったので、つぎつぎと若宮が生まれ、十六人の多きに達した。その中でも、第一皇子・尊良親王は、御子左大納言為世の娘・為子を母として生まれたが、吉田内大臣定房が自分の妻を乳母として養育したので、十五歳の時から詩歌の道にすぐれ、漢詩や万葉の古歌などの風流に心をひそめていた。

この親王と母を同じくする第二皇子・宗良親王は、髪を総角に結っている幼少の時から妙法院という寺へはいって仏道を修業したが、仏の教えを学ぶかたわら詩歌の勉強をも励んだので、仏道の徳では開祖・伝教大師にも恥じず、風流の道では慈鎮和尚をも凌ぐまでに上達した。

第三皇子・護良親王は、源師親の娘・親子を母として生まれ、幼少の時からすぐれて聡明だった。天皇は御位をこの皇子に譲りたいと考えていたが、後嵯峨天皇の御代からのち、亀山上皇と後深草天皇の、それぞれ直系の血統の親王が代わる代わる皇位につくという定めになっていたので、その順番に従い、今度の皇太子は後深草天皇の血統である持明院側から立てることになった。国事は大小となくすべて鎌倉の北条家の差金で定まり、天皇の考えどおりにはならない時勢だったので、護良親王も元服の儀式を改め、梨本の門跡（三千院）にはいって承鎮親王の弟子になったが、一を聞いて十を知るというすぐれた器量をそなえていたので、天台宗の奥義をも容易にきわめることができた。比叡山の僧たちは、衰えかけた天台宗の正法をかかげ、今にも絶えんばかりの仏法の命脈をつなぐのはこのお方のほかにはあるまいと、全山をあげて喜び合い、皇子を敬愛した。

第四皇子も同じく親子を母として生まれたが、この皇子は聖護院二品親王の弟子になり、三井寺で仏教を学ぶことになった。

このほかにも数多くの皇子がいたが、みなりっぱな器量だったので、皇室の護りはいよいよ固く、今こそ北条

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

氏を滅ぼして王業を再興する御運のひらける時がきたと思われた。

## その五　皇后安産のお祈りのこと並びに俊基の計略のこと

元亨二年の春のころから、皇后禧子が懐妊せられたので、その安産のお祈りをする、ということで、諸方の寺々から名高い僧侶を招き、さまざまの秘法を行なわせた。中でも、特に勅旨を受けた法勝寺の円観上人と小野の文観上人の二人は、御所の中に壇を設けて護摩をたき、皇后のそば近くすすんで一心不乱に祈りを捧げ、安産の法や長命の法、胎児が女子ならばこれを男子に変える法、その他いろいろな秘法を行なった。護摩の煙が皇居の内庭にたちこめ、祈禱の鈴の音は脇御殿にまでひびきわたり、これではどんな悪魔も怨霊もとうてい安産の妨げをすることはできまいと思われるばかりであった。

ところが、翌る元亨三年になっても、いっこうにお産の様子は見えなかった。のちになってくわしい事情をさぐってみると、皇后の懐妊とはまっ赤な嘘で、実は北条氏を滅ぼすための呪いの祈りを、皇后安産のための祈禱と見せかけたまでのことであった、ということがわかった。

天皇も、これほどの重大事を思い立ったことであるから、臣下の意見も聞いてみたいと考えるだけは考えたが、もし謀計が北条方へ漏れたらたいへんだという心配から、思慮ふかい老臣や側近に仕える人々にさえ話さなかった。ただ、日野中納言資朝、蔵人右少弁俊基、四条中納言隆資、尹大納言師賢、平宰相成輔の五人にだけはそっと相談し、役に立ちそうな武士を集めてみたが、お召しに応じたのは錦織の判官代、足助次郎重成、奈良および比叡山の僧兵など、わずかばかりにすぎなかった。

蔵人右少弁俊基は、代々、儒学をおさめた家柄に生まれ、その才知学識の人にすぐれていたところから抜擢され、弁官という高い役目につき、天皇の側近に仕えて蔵人の職をつとめていた。したがって用務も多く、ゆっくり謀をめぐらす閑がないので、なんとかしてしばらく家に籠り、謀叛の計略を進めたいと思っていたが、折も折、比叡山横川の僧侶が朝廷に願書を呈出して訴えごとをするという事件がおきた。

俊基はその願書を開いて読んでいったが、途中わざと読みちがえたふうを装って、「楞厳院」を「慢厳院」と読み上げた。列席していた公卿たちは顔を見合わせ、「楞の字のツクリに万の字がついているのでマンと読むのなら、相という字は、ヘンもツクリもモクだから、ソウと読まずにモクと読むべきじゃないか」と、手をたたいて大笑いをした。

俊基は顔を赤らめ、ひどく恥じ入った様子で退出したが、その後は、恥をかいたから家に引き籠る、と言いふらして、半年ほどは出仕もせず、そのあいだに山伏に変装し、ひそかに大和、河内の国々に行って城を築くことのできそうな場所を見定めたうえ、さらに東国、西国を歩きまわって、その国々の風俗や武士豪族の内情などを視察して、挙兵の準備を怠らなかった。

## その六　無礼講のこと並びに玄慧法印の講義のこと

そのころ、美濃の国に、土岐伯耆十郎頼貞、多治見四郎二郎国長という武士がいた。二人とも清和源氏の後裔で武勇の誉れが高かったので、日野資朝は縁故をたどって二人に近づき、友達としての交わりもかなり深くなっていったが、北条氏討伐の一大事を軽率にうち明けるはどうかと慮り、じゅうぶんに二人の本心をさぐるために無礼講を催してみることにした。参加したのは、尹大納言師賢、四条中納言隆資、洞院左衛門督実世、蔵人右少弁俊基、伊達三位房游雅、聖護院庁法眼玄基、足助次郎重成、多治見四郎二郎国長などで、この一党が遊宴する有様は、これを見聞きする人々を驚かせた。もとより無礼講の集まりであるから、身分の上下なしに酒を酌みかわし、男は烏帽子をぬぎ、髻を切ってざんばら髪にし、法師は法衣をぬぎ捨てて白衣になり、年のころ十七八の、容姿美しく膚清らかな乙女を二十人ばかり集め、これに絹のひとえを着せて酌をさせたのである。絹を透して雪のような白い膚がひらめくさまは、今、池の水面をやぶって咲きだしたばかりの蓮の花もかくやと思われるばかりであった。人々は、山海の珍味に舌鼓をうち、美酒を泉のように湛えて遊び戯れ、舞い歌ったが、その遊びのあいだにも、北条氏を討つ謀略は進められていたのである。しかし、いつもこんなに無意味な集合ばかりしていては、人も怪しみ咎めるだろうと思われたので、つぎには文学研究のための集まりということにして、そのころ天下無双の学才を謳われていた玄慧法印という学者を招き、韓昌黎の文集の講義を聴くことになった。

北条氏討伐の企てなどがあろうとは夢にも知らない玄慧法印は、集合のあるたびに出席して昌黎文集の深い学理を講義していたが、「昌黎潮州に赴く」という長い文章のところまでくると、講義を聴いていた人たちが、

「これは縁起のわるい本だ、今われわれに必要なのは、呉子、孫子、六韜三略でなければならない」

と言いだして、聴講をやめてしまった。縁起がわるいというのは、この文章の書かれた時の因縁をさしていったのであろう。

韓昌黎は唐の末期に出た人で、詩では杜子美、李太白

と肩を並べ、文章では漢、魏、晋、宋の時代を通じて衆にぬきんじた文人である。この昌黎に韓湘という一人の甥があった。韓湘は、文章は不得手、詩もつくれないという男だったが、道教の仙術を修業して、自然児のように気ままな日を送っていた。

ある時、昌黎は韓湘にむかって、

「お前はこの世に生をうけながら、人間の仁義礼法を無視して無為に過ごしているが、これは、つまらぬ人間のやることで、恥ずべきことだ。わしはお前のために悲しまずにはいられないよ」

と、教訓した。すると、韓湘は、嘲笑いながら答えた。

「仁義礼法などというものは、自然の道のすたれた時におこるものであり、学問や儒教は人間が自然を忘れ、ことさらしくなる時に盛んになるものです。私は自然のままに悠々とくらしてみずから楽しみ、人間が定めた善悪の尺度などは気にもかけませんよ。だから私は造化の神のお株をうばって、壺の中に天地をつくって御覧に入れますし、庭の中に山や川を現わすことだってできますよ。ところが、叔父さんなどは、昔の人の言い古した言葉をありがたがって、こうるさい道徳の枠の中でびくびくしながら一生をむだに過ごしてしまうわけで、こっちの方がよっぽどなさけなくなりますよ」

「わしにはお前の言うことは信じられないが、今ここで、造化の神のお株をうばってみせることができるかい？」

昌黎が重ねて言うのに対して、韓湘は黙ったまま、前に置いてあった瑠璃づくりの盆をうつぶせてから、すぐまたもとのようにあお向けにして見せた。すると、前には何もなかった盆の中に、碧玉の牡丹の花のあでやかな一枝が現われている。昌黎がびっくりしてよく見ると、花の中に次のような一聯の対句が金文字で書かれていた。

雲は秦嶺に横たわって家いずくにかある
雪は藍関を擁して馬すすまず

昌黎は不思議に思いながら読んでみて感心したが、この対句は文句が美しく、情趣つきない体形をととのえていながら、その意味がはっきりしなかった。昌黎が手にとってもう一度よく見ようとすると、たちまち牡丹の花もろとも、その文句も消え失せてしまった。

こんなことがあってから、韓湘は仙人の術を会得した、という評判が国中にひろがっていった。

その後、韓昌黎は、仏教を禁止して儒教を尊ばねばならぬ、という意見書を天子に上奏したことによって罪せられ、潮州へ流される運命におちいった。

彼が潮州へ行く途中のことである。日はすでに暮れ、馬もあるきなやむ泥濘の道がつづいて、目的地まではま

だ遠かった。昌黎は心細さのあまりはるかに故郷の方を振りかえってみたが、秦嶺に横たわる雲にさえぎられて、その方角さえわからなかった。心もやぶれるほどの思いで、嶮しい山道を登って行こうとすれば、行く手にある藍関という関所は雪にとざされ、通るべき道さえなかった。進退きわまって立ちどまり、ふと見ると、いつどこから現われたのか、傍に韓湘が立っている。

昌黎は思いがけない喜びに心をおどらせ、馬からとび下りざま韓湘の手をにぎり、うれし涙にむせびながら、

「先年、お前は碧玉の花の中にあらわした一聯の対句で、わしの左遷される悲しい運命を前もって教えてくれたんだな。そして、今またここにきてくれた。それで、すっかりわかったよ。わしは潮州に流され、悲しみの中で死に、ふたたび故郷へ帰る日はないであろう。お前の顔を見るのも今日が最後、ああ今こそ永別の時だ、この悲しさをどうしよう」

と言って、碧玉の花の中に見た一聯の対句を補って八句の詩をつくり、韓湘に与えた。

一封朝奏す九重の天
夕に潮陽に貶せらる路八千
聖明のために弊事を除かんと欲すれば
豈　衰朽をもって残年を惜しまんや
雲は秦嶺に横たわって家いずくにかある
雪は藍関を擁して馬すすまず
知んぬ汝が遠く来るは須く意あるべし
よし、わが骨を瘴江の辺におさめよ

韓湘はこの詩をふところに入れ、泣く泣く西と東に別れて行ったというのである。

愚かな人の前では夢の話はしないがよい、といわれているが、まったく、そのとおりである。夢は、どんなふうにでも解釈することのできるものだから、愚かな人にかかったら、とんでもない解釈をされないともかぎらない。この韓昌黎の話にしたところで、とりようによっては、どうにでも解釈することができるのだから、昌黎文集を「縁起のわるい本だ」と忌みきらった人たちも、いささか愚人のそしりを免れないようである。

## その七　土岐頼員の裏切りのこと

謀略に加盟した土岐左近蔵人頼員は、六波羅の奉行をつとめている斎藤太郎左衛門利行の娘を妻にしていた。頼員はふかく妻を愛していたので、いよいよ挙兵ということになれば、どうせ生命は捨てなければならないと思うと、妻と別れる哀惜の思いに堪えなかったのであろう、ある夜、ふと目をさますと、

「旅人が同じ木陰で雨やどりをし、同じ流れの水をのむのさえ何かの縁があってのことだというのに、わたした

ちは夫婦の契りを結んでから早くも三年になるのだから、どうして仮初の縁などということができよう。わしがお前をどんなに愛しているかは、お前もよくわかっていると思うが、しかし、定めなき人の世の習い、会うは別れの初めということもあるのだから、もし今わしが死ぬようなことがあっても、どうか心変わりをせずに、わしの後世を弔っておくれ。ふたたびこの世に人間と生まれたら夫婦になろうし、また、あの世へ行ったら、蓮の花台を半分わけて、お前のすわる場所をあけて待っているからな」

と、涙をながしながら、遠まわしに女房をかきくどいた。

じっと夫の言葉に聞き入っていた女房は、

「いったい、何事がおこったのでございます？　明日お別れすることにならないともかぎらない無常の世の中であることはぞんじておりますが、今、あの世へ行ってからのことまでおっしゃるのは、あなたのことを思いきれ、とのお心からでございますか？　でなければ、どうして、そのように悲しいことをお聞かせになられるのでございましょう」

と、恨み泣きしながら問いかえした。

頼員は覚悟もあやふやになり、ついに、かくしきれなくなった。

「実は思いがけなくも、北条氏討伐の勅命を受けたのだ。天皇の御信頼のほどを思うと辞退することもできなかったのだが、謀叛に加盟した以上は、とうてい生命をまっとうすることはできまい。考えれば切なさが増すばかりで、お前との別れの日の近づく悲しさに堪えきれず、こんなことまで話したのだ。しかし、まったく恐ろしいことだから、ゆめゆめだれにも話してはいけないぞ」

かたく口どめはされたけれど、妻は賢い女だったので、いろいろ思いめぐらしてみた。もし天皇の謀叛が失敗に終われば、愛する夫もすぐに殺されるにきまっているし、また、もし北条氏が敗亡すれば、父・利行をはじめとして自分の親族はだれ一人として助かるものはないであろう。夫と親族一統との両方を救うためには、夫の話を父にうち明け、夫を裏切者にするよりほかに方法はない。

そう思いついた妻は、その夜のうちに父のところへ駆けつけ、こっそり一部始終をうち明けた。びっくり仰天した斎藤利行は、すぐさま土岐頼員を呼びよせて、

「こんなふしぎな話を耳にしたが、いったい、ほんとうだろうか？　今の世にそんな謀叛などを企らむのは、石を抱いて淵にとびこむようなものだ。もしこれが他の人の口から洩れたら、わしらももろとも殺されなければならない。わしはすぐに六波羅殿に参上し、お前からの注

進だということにして申し上げ、お前ともども罪をのがれようと思うが、お前の気もちはどうなんだ？」

こう正面から問いかけられると、もともと一大事を妻にうち明けたくらいの男であるから、周章狼狽するのは当然である。

「この計画に加わったのは、土岐頼貞、多治見四郎二郎の勧めによったもので、けっして私の本意ではありません。何とぞ罪になりませぬよう、お取りなしをお願いします」

斎藤利行は、夜の明けるのを待たず六波羅へ駆けつけ、詳しく事件を報告した。

六波羅では、すぐさま鎌倉へ急使を立てて報告するとともに、京都の周辺に住んでいる武士に召集令を発し、参集した者から順次その名を記録し、表向きは、そのころ、河内国葛葉の地頭代に対して叛乱をおこしていた土着の武士を鎮圧し、葛葉の庄園を護るために、都内四十八個所の警備兵並びに在京の武士を召集したのだと発表した。土岐頼貞も多治見四郎二郎も、自分を捕えるための召集とは夢にも知らず、それぞれ自分の宿で、明日、葛葉へ向かう準備をととのえていた。

翌る日、元徳元年九月十九日の朝の六時ごろから、応召の軍勢は雲霞のように六波羅へ馳せ集まった。小串三郎左衛門範行と山本九郎時綱とが、北条家の定紋のついた旗を授けられて討手の大将を命ぜられた。部隊は六条河原まで進出し、そこで三千余騎の兵を二隊に分け、多治見四郎二郎の宿所のある錦小路高倉と、土岐十郎のいる三条堀河へ押し寄せた。

三条堀河へ向かった山本九郎時綱は、あまり大騒ぎをしてはかえって敵を逃がしてしまうおそれがあると思い、わざと軍勢を三条河原にとめおいて、ただ一騎、長刀をもたせた中間二人を従えただけで、そっと土岐の宿所に忍び寄り、門前で馬を乗り捨て、小門からはいって内部を覗うと、宿直の武士らしい男が武装したままで刀を枕に高鼾で眠っている。馬小屋のうしろを回り、どこかに抜け道はないかと調べてみたが、裏は土塀にかこまれていて逃げ道はなかった。

これなら安心と思った山本九郎は、奥に踏みこみ、二間つづきの客間の戸をさっと引きあけた。

土岐十郎は今しがた起きたばかりと見え、髪を結っているところだったが、振りかえって山本九郎を見るなり、きっと睨みつけ、

「よし、さあこい！」

と言うが早いか、立てかけてあった太刀をとり、そばの障子を踏みやぶって六間四方の客間へおどり出し、天井に太刀を打ちあてないように気をくばりながら、横なぐりに切りつけてきた。山本九郎は、敵を広庭に誘い出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb